

今年も、先週の水曜日から大齋節に入りました。大齋節の第1主日は、毎年、イエス様が荒れ野で悪魔から誘惑を受けられた話が、福音書に選ばれています。私たちは、イエス様の荒れ野の誘惑と言えば、「石をパンに変えてみる」とか「神殿の屋根から飛び降りてみる」などと悪魔が挑戦し、最後には、「おれに跪いたら、世界を与えよう。」と言うのに対して、イエス様が旧約聖書の言葉を引用しながら、その誘惑を退ける話を頭に思い浮かべます。そして、その出来事を、モーセたちが、40年荒野をさまよって、次々に起こった出来事、食べ物がなくなったり、神様がいるのかどうか、と岩を叩いて水のことと争ったり、金の子牛を作って、それにひれ伏したり、という事件と比べて、旧約の人々が引がかかった誘惑に、イエス様が打ち勝ったことを考えるのです。

ところが、今年の福音書には、マルコが選ばれていて、ここには「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。」としか書かれていません。

このマルコによる福音書が、一番最初に書かれた福音書です。石をパンに変えるなどの話は、後の時代の人々、特にマタイによる福音書を聞いていた聴衆は大半がユダヤ人だったということから、脚色された話ではないか、と感じます。編集者であるマタイが、旧約聖書をよく知っているユダヤ人を意識して、モーセたちとイエス様を対比させて、福音書を書いたのではないか。元々は、荒れ野の誘惑の出来事には、純粹に「荒れ野の孤独を体験する」という意図があったのではないか、と私には思えるのです。

今日の福音書は、イエス様が洗礼を受けられた話から始まります。その時「霊」が鳩のようにイエス様に降り、天からは、神様の声でしょう。「あなたはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」という声が聞こえてくるのです。これは、父なる神と、子なるイエス様と、聖霊と一緒に登場する、めずらしい三位一体の場面です。これを題材にして、聖画などが描かれたりするのでしょうか。

この神様と私たちの交わりのことを、今日の荒れ野での誘惑と関連して考えたいと思うのです。

天からの声のあと、12節で「それから、”霊”はイエスを荒れ野に送り出した。」と書かれています。聖霊がイエス様を荒れ野へと追いやったわけです。そして、40日、荒れ野にいて、サタンから誘惑を受けたのですが、はたしてどんな誘惑だったのでしょうか。

問題は「荒れ野」という言葉です。「荒れ野」というギリシャ語には、「孤独な、人里離れた、寂しい」という意味があります。そして、「誘惑」というのは、悪魔が後ろで糸を引いている、悪いイメージがあるのですが、この「誘惑」という言葉には、別に「試練」という意味もあるのです。こちらは、神様が人を鍛えるようなイメージがあります。もちろん、今日のところには、「サタンから誘惑を受けられた。」と書かれていますから、悪魔が関わっているのでしょうか。サタンとは「敵対するもの」「試みる者」という言い方をすることもあります。「荒れ野」という場所自体が、人間を試みる環境なのではないでしょうか。「荒れ野の誘惑」というのは、ですから、それらの別の意味で読めば「孤独な試練」「孤独さのゆえの試練」という風に受け取ることもできるのではないか、と思うのです。

洗礼を受け、聖霊という神様の力に後押しされながら、イエス様は「孤独さの試練」へと向かわれた、という風に受け取ったらどうでしょう。そして、この体験は、イエス様にどうしても必要だったのだらうと、私は思います。

私たちは、孤独ということ、どう考えているでしょうか。恐れているでしょうか。これはとても危険なことだと思うのです。

この孤独というのは、現代においてもとても大きな問題です。優秀な成績で大学を卒業して就職したのに、誰にも相談できないまま、仕事のストレスで自ら命を絶った話がよく聞かれます。

私たちも、人びとから孤立し、淋しい、と感じることがあるのではないのでしょうか。そんな時、しばしば陥る危険は、生きていてもしょうがない、と自殺したり、自殺しないまでも、一時的な快楽に逃げる、ということがあります。麻薬やギャンブルなど、瞬間的な喜びを求めてしまうのです。ところが、それはすぐに通り過ぎるものですから、また、より強い快楽を求めて、中毒のようになってしまう。そして、結局、自分の命を縮めてしまうようなことになるのです。

それらを「(現代の) サタンの誘惑」と呼んでもいいのではないかと私は思います。それを克服して、自分が生きていることの喜びを味わうことを、私たちは求める必要があるでしょう。

イエス様が洗礼を受けて、聖霊に促されるように、荒れ野へ行ったのも、やはり孤独な生活に耐えることだったのだらうと私は思います。人間は、孤独の中で、つぶれてしまうかもしれません。しかし、イエス様はそれに打ち勝ち、孤独な人を助けることをご自分の使命と考えられたのではないのでしょうか。

今日の福音書の後に続く所は、「ガリラヤで伝道を始める」というところです。

「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」というのがその箇所です。

イエス様は、孤独を味わい、そんな中で、大勢の病気の人々を癒されます。それは、人々の孤独を満たしてやること、励ましてやることが、福音を宣べ伝えることだと、お考えになったのではないかと私は思います。その活動のためには、やはり病気の辛さ、孤独や孤立の辛さを、自分自身味わい、それを乗り越えるような、神様からの支えを確信できているかどうか、問題だと思うのです。

みなさん、よく知っておられると思いますが、インドのカルカッタで貧しい者の中で最も貧しい者のためにその生涯をささげた、マザーテレサの言葉の中に、こんながあります。

「人間にとって最大の悲惨は、あなたは誰からも必要とされていないと感じることです。これこそが、人間にとってもっともむごい、さびしい、つらいことです。『あなたはもう必要ではない』そのとき人は倒れます」。このように言うのです。

彼女は、道で倒れて死にかかっている人々をリヤカーに乗せて、死を待つ人の家という彼女のホームに連れて帰り、二つの質問をしました。一つは、そのひとの名前を聞く。もうひとつは、その人の信仰を聞く、ということです。それまで一度も名前と呼ばれたことのないような人々をその人固有の名前で呼び、亡くなった時には、その人の信仰に沿って葬儀を行った、ということです。

名前と信仰というふたつは、人間にとって最も大切なもの、中心的なものです。誰からも必要とされていないと感じて、道端に打ち捨てられた人々を看取って行く生き方の中に、孤独を味わったイエス様の宣教の業に通じるものをマザーは感じて、働いてきたのでしょう。

以前読んだ心理学の本で、人間が、一時的な快楽ではなく、持続する充実感を感じるのは、「人を助けること。それによって、自分も役に立つ存在である、という自信をもつこと」だと書かれていました。

孤独な中で、死ぬのではなく、あなたは役に立つ人間だ、と伝え、また自覚するようになることを目指すのが大切なのではないのでしょうか。そのためには、自分自身が、孤独で、淋しがり屋である、という体験をして、そこで神様から、あるいは人々からの助けによって、支えられている喜びを持つことで、自分の苦しみを乗り越える力を感じるのです。そして、隣人の孤独にも共感して、理解して行くことが、何よりの人間らしい経験だろうと思います。それがイエス様の、そして私たちの荒れ野での試練ということの意味でしょう。

今日の福音書の終わりに、奇妙な文章が出てきました。サタンから誘惑を受けておられた間、「野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」ということです。

ここに出てくる野獣というのは、恐ろしいもののシンボルではなく、イザヤ書11章などで、平和の王が来られた時の幻に「狼は小羊とともに宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く」といった、そんな満たされた平和なシンボルです。そして、天使が出てくるのは、サタンが墮落した天使なので、イエス様を支援するために、良い天使がイエス様を励ました、ということでしょう。ですから、イエス様にとって、荒れ野は、悪魔の誘惑がありながらも、支える野獣や天使たちに見守られて、満たされた世界だったのかもしれません。

大斎節に入ったばかりですが、「荒れ野の誘惑」を受けられたイエス様が、孤独を味わうことで、そんな中で野獣や天使たちに励まされ、やがて、孤独な人々を解放するために宣教に出かけられた、ということを経験から感じていただきたい。そして、私たちがやはり、孤独な人間同士、支えられて生きていることを確信できる生活をするのが、今一番大切なことでしょう。

今年の正月は、能登半島地震から始まりました。そしてそれは、阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震などの大きな出来事を経験が活かされるのではなく、過疎の村が何日も取り残されていたために多くの犠牲が出たと思います。私たちが困っている人の隣人として、心を砕き、奉仕できるように、孤独な時を意義ある訓練になるようにしたいと思うのです。